

# 一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより

第69回

# 宇都宮停車場界限

其の一



一九〇六(明治三十九)年発行の銅版画「宇都宮真景図」には、当時の宇都宮の街並が詳細に描かれている。栃木県庁、二荒山神社、宇都宮城址は言うに及ばず、町内ことの代表的な会社、店舗などが屋号入りで紹介され、見る者を飽きさせない。特に「停車場」と記された宇都宮駅界限には、煙を上げながら走る蒸気機関車、そして旅館、倉庫が建ち並び、ゆったりと蛇行しながら流れる田川の様は、郷愁の風景そのものである。

大宮、宇都宮間に鉄道が敷設され、宇都宮駅が開業したのは一八八五(明治十八)年七月十六日。それまでこの地は川向町と呼ばれ、市の中心部である馬場町から遠く離れた人家もまばらな原野に過ぎなかった。木橋の宮の橋が架けられたのは、その翌年になってからのことである。しかし、駅の設置によりあたりは一変。旅館や運送店、人力車屋が店を構え、物資を保管する倉庫が次々に建設された。文字通り宇都宮の表玄関にふさわしい駅前成長したと言つてよい。

当時の様子をフランス海軍将校で日光を訪れたピエール・ロチは、著作「日光霊山」の中で次のように描いている。少し長くなるが引用したい。「駅を出ると、そこにはおそらく鉄道が敷かれてから急にできたらしい、全然新しいまっすぐで幅広い、そのくせいかにも日本式な、一つの街路がひらけている。奇妙な雑色の

明治時代末期の宇都宮駅。右奥の洋館が白木屋ホテル。その手前が宇都宮通運合名会社の倉庫

夥しい看板をつけたり、長い竿のさきではためいている夥しい小旗を立てていたりする。あめ屋だの、提灯屋だの煙草屋だの、薬味屋などの店。白木づくりの茶屋。門さきで客引きをし、巴厘杏のような眼をくりくりさせている滑稽な小婢ども。街上には、人力車と俵夫たちのこったがえし」(『秋の日本』村上菊一郎・吉永清/訳/角川書店)

ロチが来日したのが一八八五年七月。日光を訪れたのは晩秋のころだった。前述した駅頭の風景は、宇都宮駅開業から二カ月ほど後のころと思われる。掲載した「栃木県営業便覧」(二九〇七(明治四十)年発行)の店舗案内からも、駅前の繁栄ぶりが目に浮かぶ。



『栃木県営業便覧』に記された停車場界限。旅館と運送店が建ち並ぶ